

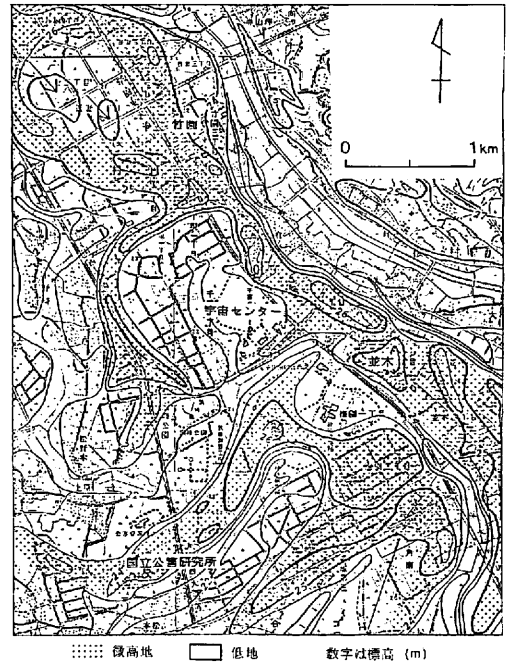
筑波・稲敷台地面の微起伏とその形成過程

水 谷 香 (白 然 学 類)

一見して平坦とみなされてきた筑波・稲敷台地面上に、比高2m程度の微起伏があることが、大縮尺(1/2,500, 1/5,000, 1/10,000)の地図の読図および現地調査によって判った(第1図)。本報告では、台地面の高度分布からこのような微起伏の存在と分布を明らかにし、野外での露頭観察、ボーリング資料の解析結果を加えて地形面区分を行い、微起伏の形成過程を考察した。

調査の結果、台地面を、高位のものから常陸面・村田面・竜ヶ崎面の3面に区分した。常陸面は成田層の堆積面で、その表面には方向性のない不規則な波状の起伏がみられる。村田面には、第1図にみられるような、樹枝状に伸びる微高地とその間をうめる盆状の低地がみられる。これらの微高地・低地とその構成物質の層相とはよく対応しており、微高地には砂質相が、低地には泥質相がみられる。これらのことから、村田面は古鬼怒川の延長川がつくった鳥趾状三角州の面で、微高地はこの三角州の河筋ぞいのみ砂質物が堆積して高くなったもの(自然堤防)で、低地は後背湿地だったために泥質物が主に堆積し、低いのだと考えられる。竜ヶ崎面は古鬼怒川による河成層の堆積面で、表面には自然堤防状の高まりが断片的にみられるもののほとんど平坦である。

以上のことから本台地の地形発達を考察した。(1)下末吉海進に伴い常陸面が形成された。(2)続く海退期に古鬼怒川が常陸面を下刻した。(3)再び海進が生じ、高度の低かった台地南部では海成層が堆積した。(4)海進絶頂期とそれに続く海退期に、鳥趾状三角州が南東部を除く本台地の大部分に発



第1図 台地面上の微起伏の例(竹園・並木付近)

達した。(5)さらに海退し、途中の小海進または海面安定期に蛇行河川を呈する古鬼怒川が竜ヶ崎面を形成した。

本研究の結果、第1図にみられるような微起伏は、高度が異なるだけでその構成物質にも違いがあることが明らかになった。したがって、台地上の小気候や台地表層における水の流出や浸透現象、さらに土壌や植生の分布、またそれらを反映している土地利用などは、この台地上の微起伏と密接に関係しているものと思われる。